

小林文雄は、ハンセン病療養所での生活を長年にわたり撮影してきた。その写真は、園内の出来事や日常を記録するものであると同時に、ひとりの入所者としての視点から切り取られたものでもある。

一見すると、これらの写真は行事や作業風景などを写した記録写真のように見える。しかし、画面の中に自身の姿が含まれていたり、人物や状況が意図的に構成されていたりするなど、演出的な要素を見出すことができる。

小林は、療養所という生活空間のなかで、目の前の現実をただ記録するだけではなく、写真の中に演出を加えることで、自らの感情や記憶を表現しようとしたのではないだろうか。それは、外部から語られてきた「療養所」のイメージとは異なる、そこで暮らしたひとりの人間の視点から、経験された時間や場所を捉え直す試みとして見ることもできる。

本展では、写真集『小林文雄写真集 九十三歳の回顧録―邑久光明園の日々―』を手がかりに、残されたフィルムから新たにプリントした作品を展示した。記録と演出のあいだを行き来するそれらの写真からは、邑久光明園で生き、写真を撮り続けた小林文雄の視線が静かに浮かび上がる。

文 キムラ タダシ